

# 高村光太郎「美しい山上の戀」の 記事をめぐって (一)

広 瀬 朝 光

「美しい山上の戀」の記事は、大正二年九月五日(金)、東京日日新聞の二面から七面にかけて、四段にわたって細長い記事として掲載された。この記事は『高村光太郎』(日本文学アルバム19、筑摩書房、一九五六・四)、高村光太郎の「智恵子の半生」(昭和15・9)には「山上の戀」、また高村光太郎全集(筑摩書房)別巻『高村光太郎研究』(草野心平編、昭和34・3、筑摩書房)巻尾所収の年譜(北川太一編)、並びに『光太郎回想』(高村豊周著、昭和37・4、有信堂)には、「美しい山上の戀」、或は「美しき山上の戀」などとあって、いずれも新聞記事の見出しを誤って伝えている。しかも、この記事が光太郎智恵子の結婚に重大な契機を与えているのにもかかわらず、その内容は「光太郎資料18」(北川太一編)、或は『高村光太郎資料 第四集』(北川太一編、昭和48・10、文治堂書店)に紹介されている程度である。筆者は昭和46年6月、日本文芸研究学会(於東北大学)で、この論文の表題のもとに研究発表を行なった。その後十数年の歳月を経ているが、今回ようやく構想がまとまったので、駄文を草することにした。研究発表をした当時とは異なり、資料面

で出来るだけ新鮮味を出すように努めた。

## 二

ところで筆者は、今夏、福島県安達郡安達町役場を訪れ、光太郎の妻智恵子、並びに妹せき子の戸籍を調査した。長沼智恵子は、戸籍ではチエ(長女)、その妹達もセキ(二女)、ミツ(三女)、ヨシ(四女)、セツ(五女)、チヨ(六女)と全部片仮名で書かれている。二人の弟は、啓助(長男)、修二(二男)と漢字名である。チエの兄は、ワ行の恵(多)である。智恵子の妹せき子は、高村光太郎の「智恵子の半生」、書簡の中などに屢々登場するが、その存在の意味が不明確なので、調査してみた。従来の研究では、光太郎と智恵子との恋愛において、妹せき子は恋の仲介役を務めたかのように位置づけられているが、これは必ずしも正しくはない。

明治天皇崩御の後、私は犬吠へ写生に出かけた。その時別の宿に彼女が妹さんと一人の親友と一緒に来てみて又会った。後に彼女は私の宿へ来て滞在し、一緒に散歩したり写生したりした。様子が変に見えたものか、宿の女中が一人必ず私達二人の散歩を監視するためついて来た。心の中しかねないと見たらしい。智恵子が後日語る所によると、その時若し私が何か無理な事でも言ひ出すやうな事があったら、彼女は即座に入水して死ぬつもりだったといふ事であった。私はそんな事は知らなかったが、此の宿の滞在中に見た彼女の清純な態度と、無欲な素朴な気質と、限りなきその自然への愛とに強く打たれた。君が浜の浜防風を喜ぶ彼女はまったく子供であった。しかし又私は入浴の時、隣の風呂場に居

る彼女を偶然に目にして、何だか運命のつながりが二人の間にあるのではないかといふ予感をふと感じた。彼女は実によく均整がとれてゐた。やがて彼女から熱烈な手紙が来るやうになり、私も此の人の外に心を託すべき女性はないと思ふやうになった。それでも幾度か此の心が一時的なものではないかと自ら疑った。又彼女にも警告した。それは私の今後の生活の苦闘を思ふと彼女をその中に巻きこむに忍びない気がしたからである。其の頃せまい美術家仲間や女人達の間で二人に関する悪質のゴシップが飛ばされ、二人とも家族などに対して随分困らせられた。然し彼女は私を信じ切り、私は彼女をむしろ崇拜した。悪声が四辺に満ちるほど、私達はますます強く結ばれた。(智恵子の半生、昭和14・9)

松島光秋氏の『高村智恵子―その若き日―』(永田書房、昭和52・10)所収の光太郎との邂逅によれば、大正元年八月に長沼智恵子は郷里二本松に戻り、医師寺田三郎との結婚話を断り、銚子の犬吠崎に行き、最初は御風館に親友の一人と妹のセキとの三人で泊り、次いで光太郎が宿泊している暁鷄館に移ったと書いてある。その親友の名前は、不明の様子である。

『高村光太郎全集 第十四卷』(昭和33・6、筑摩書房)には、光太郎が大正元年から大正二年にかけて智恵子の妹せき子に認めた手紙八通が残っている。

三七 (一〇月五日(年代推定))

巻紙墨書)

長沼ちゑ子様お妹様 封筒缺

此の間の夜はあまり突然のこととして何の御愛想もいたされません

でしてまことに失禮いたしました それに折角お目にかゝりながらろくろくお話しへも出来ませんで本意ない事に存じました どうぞあれにおこりにならず御暇もございましたら又お遊びにおいで下さいますやう うまい紅茶やお好きなあづきもたんとさし上げますから 同封にて失禮の段おゆるし下さいまし 十月五日

高村光太郎 宛 長沼ちゑ子様お妹様御座下

三八 (一〇月七日(年代推定))

書]

長沼勢き子様 封書 巻紙墨

御手のみ拝見して一方ならず感動いたしました そしてあなたの御心痛のほどもよくわかりました 何といふ悲しい私たちの場合でせう 今手かみで私のおもふ處を書き盡せるやうな気がいたしません それにあなたのお考へをも今少しくはしくおきき致したいこともございますゆゑ お暇の折いま一度お遊びかたゞ御來車下さいますせんか 私が参上してもいいのですけれどもお話しも出来ずまいと存じますのでございます 前にちよつとお葉書でも下されは必ずお待ちいたします 私はあなたの大事なお姉様を如何なる時でも塵ほども傷けることではございません 世の中に傳はつてゐるきたらしい噂をも耳にはして居ります しかしそれに對しては 噂をする者等こそ自身を愧ぢよとおもつて居るばかりでございます とにかく私は世間並のきたない人間ではありません 此事だけをよくお含み遊ばされてあまり御心配をすごされ遊ばさぬやうおねがひ申し上げます それでは何もかもお目にかゝりたる時に申し上げます あらあら御返事まで 七日夕

高村光太郎 宛 長沼せき子様御座下

三九 〔二月二日 府下高田村雜司ヶ谷七一 長沼せき

子様 駒込林町二十五より 封書 巻紙墨書〕

御手かみ拝見 うれしく存じ上げます しばらく私も外へ出ま  
 さんのでお手帑を見てさへ山や野の空氣を氣持ちよくくゝるに感じ  
 ました このいゝお天氣のかはらないうちに私もまゐりませう

お姉様をももちろんお誘ひいたしませう ほんとにいゝお天氣  
 です お姉様もさぞお氣持ちがいゝだらうとおもつてゐます 今  
 忙かしくて手帑をお姉様にかゝれませんゆゑどうぞよろしくお傳  
 へ下さいますし この二三日うちに天氣が變らなければいゝがとそ  
 れを念じてゐます 御返事までとりのいそぎ亂筆のまゝ 十二日  
 宛 長沼勢き子様

四一 〔三日夕(年代推定 月不詳) 雜司ヶ谷七一 長沼せき

子様 駒込林町二五より 封書 巻紙墨書〕

取りいそぎ亂筆のまゝにて御免下さいまし 日曜の演奏會にお姉  
 様をお誘ひ申し早速御送りいたす處でございましたが氣候のよろ  
 しき爲めか彫刻の感興抑へがたくいづぞやちよつと御覽に入れた  
 るお姉様の肖像をいちり始めてつひ半日又半日と重なりて意外の  
 我儘をいたしあなたの御心配のほどに今日思ひ及びまことに恐縮  
 ひたすら恥入り候 つひうかうかといたし居る事申わけも無  
 し 何卒此度はあしからず思召して下さいまし お姉様と御一緒  
 に小生参りたくおもつて居ましたが餘り變に存しますから失禮な

がら此の手がみをおことづつていたします あの前像がほんとうに  
 出来上りましたらどうか御一覽下さいまし 又寫眞にでもとつて  
 お國の方へお送り御笑覽に備へませう 重々御詫まで 三日夕  
 高村光太郎 宛 長沼勢き子様机下

大正二年(一九一三)

四二 〔二月八日夜 府下高田村雜司ヶ谷七一 長沼せき子

様 駒込林町二五より 封書 巻紙墨書〕

御手かみ只今拝見しました いろいろ御心配をおかけいたす事  
 おもふと本當にすまないと存じます お姉様のおたちのことは電  
 報で承知いたしました 先日おいでの時にお約束いたしましたこと  
 がございますね 御兩親様のおこころもちを漏れなくお傳へ下さる  
 といふ事でした 御兩親様のおこころもちをうけたまはるについ  
 てはあなたがたつた一つの頼みなのです お姉様はともそんな  
 事を知らせては下さらないしあなたまでがお姉様のお言葉の通り  
 にしておいでとしたら私は何日までたつてもうけたまはるととき  
 ありません それでは困ります そのうへ正當な事を避忌するの  
 は卑怯ですもの どうぞお國元のお話をお聞かせ下さいませ

幾重にもおねがひいたします 私はものを避けるのはイヤです  
 何にでも正面からぶつかつて行きたうございます 常にさう心  
 懸けて居るのでございます このごろは午後は大抵宅に居ります  
 もしお差支のないお暇のときがありましたらおいで下さいませ  
 んか それともお差支がないならばお宅の方へお伺ひいたしても

よろしうございますがそれは如何かと存じて居ります。とりあへず御返事まで 艸々頓首 九日 高村光太郎 ㊦ 長沼せき子様机下

四五 一月一六日 府下高田村雜司ヶ谷七一 長沼せき子様 駒込林町二五より 封書

昨今は寒さが中々烈しい様ですが御變りもなくておいででせうかお姉様からもしばらくお消息がありませんので心配して居ります。がやはり御無事なのでせうね。私ももう五六日しますと少し長い旅を爲るつもりで居ります。かなり遠くまで行かうとおもつて居ります。當分お目に懸れない事と存じます。それゆゑ若し御用がございましてしたら御手紙で結構です。からちよつとその前におきかせ下さるやうおねがひいたします。十六日 高村光太郎 長沼せき子様机下

四七 一月二九日 府下高田村雜司ヶ谷七一 長沼せき子

様 駒込林町二五より 封書 巻紙墨書

御手がみ拝見。私も大層御無沙汰いたして居ります。姉さんからは近いうちお歸りになるとのみの手がみでした。それゆゑまだお歸りの日はわからないのです。御用の御都合と申すことです。からキツト繪をかきかけていらつしやるのだとおもひます。それであればお友達の方の御都合だとおもひます。でも大變氣もちよくしてゐらつしやるやうで私も安心して居ります。馬やスキーを私が心配するからといつておやめになつたといふことは大變お氣

の毒な事だとおもひます。心配することは事實ですけれどその爲めに折角のことをおやめになるといふのはいけないとおもひます。からお手紙のおつひでにその事をお傳へ下さいまし。姉さんのおところに無理でなければいくら長く旅にいらしたつていいのだとおもひます。此の間はどうもそれがさうでないやうにもおもはれ又私のこゝろも悩んでゐたものです。から歸つて下さいなどおねがひしましたのです。今のやうならば何も急にお歸りにならないとおもひます。私もお待ちしてゐましたがちよつとお歸りのほどがわからないのでともかく旅に一度出かけようかと考へました。諏訪の混雜を思ふと彼處もイヤ。小田原へゆく事にしたのですが又何だか旅に出たあとへ姉さんがお歸りでは濟まないやうに考へられました。一層のことおとなしく東京に姉さんのお歸りを待つて居やうと決心しました。姉さんの事を思ふと私は何でも出来るやうな勇氣が湧いて來ます。今の處私はお父さんやお母さんのおこゝろをお推察して其がすこし氣になつて居ります。切手はいくらもあつたのですが今手許にはこれだけしか見あたりません。又郵便のあるたびにこんどは棄てずにとつて置きませう。おひまの時には遊びと思つてお寄り下さいまし。もうむつかしい話は止して私の朗讀か大變な音樂でもおきかせ申しますから。そしてミツ豆でも御馳走いたしますから。亂筆御免下さいまし。筆がわるいんです。から爲方がないんです。二十九日夕 光太郎 ㊦ 長沼せき子様 二階堂さんからお便りがあります。右の八通の手紙は、智恵子の妹のせき子への返事として書かれた

ものである。せき子の手紙は現存していないので、事の次第は光太郎の手紙を読んで類推する以外に方法はない。これを簡潔にまとめると(1)せき子が姉の智恵子と光太郎との仲が、世間に噂として広まるのを心配している。(2)光太郎は、長沼家の両親が自分と智恵子との仲をどのように考えているのかを懸念し、せき子を介してその様子を探ろうとしている。この(1)(2)の二点が浮かび上ってくる。

筆者は拙稿「N——女史に」(アルテス・リベラレス第40号、岩手大学人文社会科学部紀要)において、小説家田村俊子の「悪寒」について触れた。「悪寒」は短編小説で、大正二年五月、新潮社から出版された『誓言』(田村俊子著)の中に所収されており、『誓言』、『魔』、『嘲弄』、『悪寒』、『離魂』、『紫色の唇』、『上方役者』、『雪ぞら』、『その日』、『おとづれ』、『女作者』など十一編の短篇小説集から成る著書の中の一編である。「悪寒」は私小説であり、モデルは、長沼智恵子(あなた)、高村光太郎(Vさん)、田村俊子(私)、田村松魚(あるじ)である。物語は高村光太郎と長沼智恵子の犬吠岬写生旅行、智恵子の結婚話、智恵子との交際、智恵子「團扇繪」田村俊子「あねさま」陳列会(明治45・6・24〜28、於琅玕洞)の想い出、夫田村松魚との不仲などが話題となっている。なお附言するならば、『誓言』(田村俊子、大正2・5、新潮社)所載十一編の短篇小説集のうち、田村俊子が長沼智恵子を題材として取り扱った小説は三編あり、『魔』(大正1・2)、『悪寒』(大正1・10)、『女作者』(大正2・1)がそれに当たっている。

紙数の関係もあり、ここでは(i)と(ii)の一部を引用する。「悪

寒」の冒頭は、左の書き出しによって始まっている。

(i) 高村光太郎と長沼智恵子の犬吠岬写生旅行

「なんでもいゝから私の心に觸つて貰ひたくないの。私の心にはさられるのが厭なの。」

あなたは斯う云つて何處かへ行つてしまった。結婚の事も打つ棄らかして、私も打つ棄らかして、あなたは何處の山の奥へ行つてしまつたんです。

あなたは何かが崎とから、たつた一枚の端書を下すつたばかりです。「海ばかり眺めてゐる。力つて美しいもんですね。」こんな事があの端書の中に書いてありました。あなたはそんなにして海の力の美しいのに惚れんくしてゐらしたんですか。………然うではないでせう。あなたはもしか温い唇のやうな甘い魅力にその滑かな純な血を悶えさせて、さうして戀の力の美しく大きいのに恍惚してゐるのぢやないんですか。

あなたの端書をおだしになつた何とかが崎とかには、あなたの大好きなVさんが遊びに行つておいでのやうですね。あの端書にこれから山の奥へ行くとありました、今頃は何處の山の奥で、自由な戀にあなたの初心な瞳子をふるはしてゐる事かと思ふと、私は自分のからだの中の血汐が鹽つばくなつてくるやうな氣がします。

あなたが居なくなつて了つた後の私は、浮世を寂しがつて、さうして矢つ張りあなたの事ばかり思つてゐます。あなたと云ふ人が懐しいんです。(以下、略す。)

(ii) 智恵子の結婚話

あなたはあの晩私にとぅ／＼何も云はないであれ限りで何處かへ行つてしまひました。

「戀と云ふやうなこと？」

私が斯う云つて聞きかけたなら、あなたは「え」と云つたぎり、いつまでも考へながら歩いてゐたでせう。さうしてその後をとぅ／＼云はないであの晩限りで別れてしまつた。

然し私は知つてますよ。一旦結婚しやうと決心したあなたが、又其の結婚がいやになつて、さうして年老つた御両親にも反いて、その事の爲に心配してゐる妹さんも抛りだして、自分の心に觸られないところまで何處までも逃げて歩くと云つて何所かへ行つてしまつたあなたは、恐らく今頃はその大切に圍んでゐる御自分の心を、そつくり其の儘に誰かの胸の内にあづけてゐるに違ひない。さうしてそれはVさんの胸に違ひない。――

自分の心にさはられまいとして、力いづばい自分の周囲を遮つて、さうして或る一人の胸にその心を包ませやうとしてゐるあなたの若さ、さうして鮮さが、私には悲しく美しい。……けれどこれは今別れてゐるあなたを思ひやつて斯うした涙も浮べるのですけれど、大凡然うであらうと見當を付けたあの晩の私は、その爲にあなたがたゞ憎かつたのです。

去年初めて私があなたに逢つた頃、あなたはこんな手紙を私によこしました。

今の私と云つたらたゞもう闇い色にさ迷つてゐるのです。私は私にとつていま恐しい問題を抱いてゐるんです。昔から今の、凡

ての人、あらゆる書物、然う云ふものは近頃私の頭に漲つてきたやうなこんな事を、あからさまに誰も教へてはくれなかつたのです。こんがらかつてゐるこの頭がその内に解釋してくれるかも知れないと思ふのですが、その時初めて自分の歌ひ度いと思ふ様な世界が私の前に開けてくるのでせう。私はよく知つてゐます。今の私には歌はうとする何物も持つてはゐないので。――けれどこんな事は自然その人間一人のことですからね。ね然うでせう。生れた時に私は二人で出てきはしなかつたのです。私には孤獨と云ふ様な事がちつとも不思議とも思ひませんの。獨りと云ふ事は随分いゝ味で、芳烈な高い匂ひですわ。そりや色はないかも知れないけれど。

あなたは忘れたかも知れないが、私は斯う云ふあなたの手紙が取つてあります。私はこの手紙を見てあなたは戀の色彩のあるローマンスを自身の上求めてゐるのだと思ひました。さうして多くの男の友達を持ちながら、つひぞ今まで戀を知らずに來たと云ふあなたが、私には小鳥の手觸りのやうに柔らかく、可愛ゆく懐かしかつた。さうしてあなた自身身の藝術が、あなたにさうした自超して生活をつゞけさせたと云ふ事も私には嬉しいのでした。嬉しいのと同時に、私は私の蝕まれた多くの年齢を振り返つて見てどんなに恨めしく悲しく思つたか知れませんでした。あなたと私とは三歳しきや違はないんです。(後略)

(一)は高村光太郎の「智恵子の半生」(昭和14・9)で既に引用したように、大正元年八月の犬吠崎写生旅行中の出来事を、智恵子の

親友田村俊子が小説の材料として取材したもので、当時の実情を良く知る者の発言は、たとえそれが虚構の小説であるにしても、真実味を帯びているといえよう。とするならば、ここに記されている結婚の事というのは、「N—女史に」(アルテス・リベラレス第40号、1987・6)の論考でも触れた智恵子の郷里福島県二本松町三森町の寺田三郎(医者)との縁談であったであろう。この小説に書かれている何とかが崎が、犬吠崎を指し、あなたが智恵子を、Vさんが高村光太郎を、私が田村俊子であるのは論を俟たないであろう。

(ii)になると、初めて人物関係が明らかになってくる。寺田三郎と一旦は結婚しようと決心した長沼智恵子は、またその結婚が嫌になり、そうして年老いた両親にも背き、姉の結婚について心配している妹のせき子をも抛り出して、高村光太郎の胸の内に飛び込んだと書かれている。多分、智恵子は田舎町在住の医師との平凡な結婚を望まなかったのである。しかし智恵子の両親は、長女の智恵子に郷里で共に暮らすことを望み、妹のせき子を通じて、高村光太郎との交際を止めるようにと働きかけた事実が想像される。せき子と光太郎の文通の事実、犬吠崎の旅館での一件などは、せき子が郷里の年老いた両親の意を受けて、光太郎と智恵子との仲の深まるのを監視していた節もあり、そのために光太郎はせき子に気を遣ったのである。田村俊子(明治17年4月25日生)は長沼智恵子(明治19年5月20日生)と三歳違いで、大正元年当時既に二十九歳であり、田村松魚と結婚していた。そのせいか、智恵子の若々しくも、恋に波打つ熱い血汐を一層恙ましく感じたのであろう。

智恵子の妹セキは、真壁仁「高村智恵子の一生」(「高村光太郎と

智恵子」草野心平編、昭和34・4、筑摩書房)、『ふるさとの智恵子』(佐々木隆嘉、昭和53・6、桜楓社)、『光太郎智恵子』(高村光太郎、高村智恵子、昭和35年8月、龍星閣)などに詳しく書かれており、小宮という苗字の妻子もある男性と間違いを犯し、私生児(女児)を生んで日本に居ずらくなり、米国に渡り(大正四年)、その後武井氏と結婚し、二児の母となった。福島県安達郡安達町役場に在る長沼セキの戸籍には、出生届は出ているものの、結婚・出産・死亡などの届は一切記載されていない。

### 三

高村光太郎が、「N—女史に」(大正11・9)、「或る夜のころ」(「N—女史に」)、「涙」(「N—女史に」)、「おそれ」(「N—女史に」)などの詩を相次いで発表するに従い、美術家仲間や女人達の間で、二人に関する悪質のゴシップが飛ばされ、光太郎も智恵子も家族などに対して随分と困ったらしい。

### 梟の族

——聞いたか、聞いたか  
ぼろすけぼうぼう——  
軽くして責なき人の口の端  
森のくらやみに住む梟の黒き毒に染みたるこゑ  
街と木木ちまたきぎとにひびき  
わが耳を襲ひて堪へがたし  
わが耳は夜陰に痛みて

心にうつる君が影像を悲しみ窺ふ  
 かるくして責なきは  
 あしき鳥の性なり

——きいたか、きいたか  
 ぼろすけぼうぼう——

おのが声のかしましき反響によるこび  
 友より友に伝説をつたへてほこる

梟の族、あしきともがら

われは彼等よりも強しとおもへど

彼等はわれよりも多辯にして

暗示に富みたる眼と、物を蔵する言語とを有せり

さればかろくして責なき

その聲のひびきのなやましきよ

聞くに堪へざる俗調は

君とわれとの心を取りて不倫と滑稽との境に擬せむとす

のろはれたるもの

梟の族、あしきともがらよ

されどわが心を狂ほしむるは

むしろかかるおろかしきなやましきなり

聲は又も来る、又も来る

——きいたか、きいたか  
 ぼろすけぼうぼう——

十月二十日

(大正1・10)

「梟の族」は、大正元年十月二十三日に作られた。この詩は、梟の擬音であるぼろすけぼうぼうを反復させて用いることにより、夜陰に活動するこの肉食鳥の獣性をあらわにし、光太郎と智恵子の悪い噂を播き散らす不逞の輩になぞらえさせるのに成功している。光太郎自身がこの詩の中に用いた言葉により、当時の世間の噂とは、二人の恋愛を「不倫と滑稽との境に擬せむとす」といったものであつたらしい。不倫とは、結婚前の男女が、慎みの心を忘れて異常に親しくする二人の恋愛関係を指していたのであろうし、滑稽とは、思慮分別もあり、年かさも既に三十歳になんなんとする大人の男女が、愛だ恋だといって世間を騒がせるのは、狂気の沙汰と見做されたためであつたらう。このために、世間の人々は、二人の恋愛を良識的な行動とは認めずに、数多くの人々が非難の声を浴びせたのである。しかし、光太郎は西欧風の自己中心的な生活に感化され、洗練された人間でもあつたので、個人の恋愛や個人の生活に他人が干渉する筋合いはないという固い信念を抱いており、詩「或る宵」(大正1・10・23作)には、光太郎の西欧風の自由思潮の影響の翳が宿っている。従つて、彼には恋愛詩の発表については、反省の色は微塵もなく、むしろ彼と智恵子とが相携えて、かかる批判的な世の風潮に対して、積極的に闘つて行かねばならないとの決意を固めるのである。



或る宵

瓦斯の煖爐に火が燃える  
ウウロン茶、風、細い夕月

——それだ、それだ、それが世の中だ  
彼等の欲する眞面目とは禮服の事だ

人工を天然に加へる事だ  
直立不動の姿勢の事だ

彼等は自分等のところを世の中のどさくさまぎれになくしてし

まった

曾て裸體のままであつた冷暖自知の心を——

あなたは此を見て何も不思議がる事はない

それが世の中といふものだ

心に多くの俗念を抱いて

眼前咫尺の間を見つめてゐる厭な冷酷な人間の集りだ

それ故、眞實に生きようとする者は

——むかしから、今でも、このさきも——

却て眞摯でないとせられる

あなたの受けたやうな迫害をうける

卑怯な彼等は

又誠意のない彼等は

初め驚異の聲を發して我等を眺め

ありとある雑言を唄つて彼等の閑な時間をつぶさうとする

誠意のない彼等は事件の人間をさし置いて唯事件の當體をいち  
くるばかりだ

いやしむべきは世の中だ

愧づべきは其の渦中の矮人だ

我等は爲すべき事を爲し

進むべき道を進み

自然の掟を尊んで

行 往坐臥我等の思ふ所と自然の定律と相戻らない境地に到ら

なければならぬ

最善の力は自分等を信ずる所にのみある

蛙のやうな醜い彼等の姿に驚いてはいけない

むしろ其の姿にグロテスクの美を御覽なさい

我等はただ愛する心を味へばいい

あらゆる紛糾を破つて

自然と自由とに生きねばならない

風のふくやうに、雲の飛ぶやうに

必然の理法と、内心の要求と、叡智の暗示とに嘘がなければいい

い

自然は賢明である

自然は細心である

半端物のやうな彼等のために心を悩ますのはお止しなさい

さあ、又銀座で質素な飯でも喰ひませう

十月二十三日

この当時、長沼智恵子は、妹セキと共に東京府下高田村雑司谷七一九番に下宿していた。高村光太郎が初めて智恵子を愛人よと呼びかける詩は、「郊外の人に」(大正1・11・25作)である。この詩は光太郎にとっても忘れられない詩であつたらしく、「智恵子の半生」にも、詩の一部分を載せている。詩の題名は、智恵子の住所が東京の郊外に位置していた事実起因している。愛人を神格化し偶像化して、審判官たらしめている手法は、後年智恵子の死後、彼女が個人的存在を失うことによつて、かえつて普遍的存在となり、身近かに彼女の息吹を感じて、いつも自分と共にいるという実感を伴わせることにより、通常の心の平静と健康とを取り戻したという思考法と極めて類型的であり、非現実的な倒錯により幻想的な美の世界に遊泳するのが、この詩人の一つの特色でもある。「郊外の人に」の詩は、愛人である智恵子が、安らかに郊外の家で眠ることを願うものであり、同時期に作られた「冬の朝のめざめ」(大正1・11・30)は、愛人が郊外の家で目覚める姿を、をさな児のごとくと描写して、愛の頌歌を歌うのであつて、光太郎の意識にあつては、就寝、起床といった一連の動作が、一對の絵画として幻想的抒情的に描かれている。総じて、大正元年における光太郎の智恵子に対する恋愛感情は、慕情から始まり、愛人と呼ぶまでに到つた過程を経たのにすぎない模様である。

既に指摘した田村俊子の小説「魔」(大正1・2)には、田村俊子(下搦子)、田村松魚(下類三)、長沼智恵子(甲野利世子)、長沼セキ(甲野卷子)、若い青年(狭山春作)の五人が登場している。この小説は三節から成り、第一節は主婦である下搦子のところに、若い

青年狭山春作から屢々手紙が寄せられるようになり、それがやがて恋文へと變つて行つた。第二節は搦子が雑司ヶ谷に住む女友達を訪ねて行く場面である。

雑司ヶ谷の方へ行く道を曲つてから、直ぐ右側の新しい家の前に搦子は立つた。出窓の硝子の中から見付けた女が急いで格子の方へまはつた。

「もういらつしやらないんぢやないかつて云つてましたの。」  
利世子が然う云ひながら格子を開けた。

卷子が窓を開けて其所から搦子の方を視ながら笑つた。

洋畫をやつてる利世子が明日から赤城の方へ旅に出るので今夜三人寄つて何か話をしやうと云ふ約束だつたのだけれども、わざ／＼寄り合はうと約束して逢つた時は面白い話もなくつて別れるのがいつもの癖であつた。搦子は疲れた目をして食卓に寄りかゝつてゐた。卷子は自分の仕事をしてゐる教會の内部の話や、傳道のために英米から來てゐる西洋婦人の勤勉なことなどを話してゐた。

「あの人たちは學問をする事をひとつの趣味に解してゐるのね。ミクス×××なんかはバツサル大學を卒業して來て、宗教の爲めにいま日本語を勉強してゐるのよ。尋常一年の讀本を持つてやつてるのよ。大きな仕事だわねえ。然うしてやつぱり凡てが世界的ね。傍にゐる私なんぞはほんとに小さなものだと思つてつく／＼嫌になつてしまふ。」

こんな話をして利世子も搦子も興に乗らないことを知つてゐる卷子は直きに止めてしまつた。

「淋しいつて?」

鴫子はこの間卷子から貰った手紙のことを思ひ出してかう聞いた。鴫子は卷子がむいてくれた林檎をナイフで裁ち割りながらそれをナイフの尖きに突きさしては口の中に入れた。さうして脂肪でねち／＼した下腿の太った卷子の顔を見た。もう三十にならうとしてまだ未婚であるその人の鞠のやうにふくらんだ胸元や、小さい袖口に括り締められてる弾力のある赤味をもつた腕などをちつと見てゐると、いつもながら鴫子は何も支へる力のない自分の身體の上へのしかゝつてくる重さを望むやうな壓迫を感じる。鴫子は何となく自分の背筋が波のやうに揺れるやうな氣がした。鴫子の眼はくぼんで眼尻が紅をさしたやうに刻みをつけて釣れてゐた。

「今夜のあなたの顔はね、ばかに神経的よ。」

卷子は小さな初々しい眼の働きを見せながら鴫子の身體にびたりと寄つてその手を取つた。卷子が鴫子に逢つたときは、きつとかうして鴫子の身體の何所かしらにその手を觸れてゐないではあられないやうに別れるまで執拗くその肥満つた身體を鴫子にすりつけてゐる。鴫子はいつとも然う云ふ卷子の發作的の愛着の自由になつてゐた。

「私はねいつそ尼か救世軍にでも入らうかと思つてゐるの。ほんとうに。今の私の生活から比べたら尼の生活なんぞはなんでもない。」

卷子は聲に力を入れてゐた。

「尼になるんですつて。頭を剃つて。」

利世子は遠くの柱に寄りかゝつてゐた。さうして然う聞いた。

「いつたい何うして日本の尼は頭を剃るんでせう。髪をおとすつて事は何の現はしなの。」

「禁欲の徴しるしちやありませんか——私は頭を剃ることぐらゐ何でもないと思ふ。とてもこんな欺いた苦しい生活はつゞけてゐられないんですもの——そりや私の生活は苦しいんですもの。」

卷子は然う云つて口を結んだ。卷子は何日中いつかちゆうは南米へ行くこと云つてゐた。それから又非常な金儲けがしたいと云つてゐた。宗教的でなくつて何か救世の大事業がやつて見たいとも云つてゐた。卷子は何時逢つても少し話してゐるうちに直きに太つた顔を倦んだ血にみなぎらして眠い／＼と云ふのが癖だつた。

吐きだしどころのない濁つた血がだん／＼體內を溶かして行つて卷子の神経をにぶらせるのではないかとも思はれた。卷子の肩や股が鴫子にはうづく様に見えた。利世子も鴫子もだまつてゐた。

窓の障子の紙が紺どさをかさねたやうに薄暗く暮れてきた。利世子の妹がらんぶを點けて卓の上に載せて行つた。洋燈の笠の桃色絹の柔らかい色が、くすんだ人々の身の圍りに華やかな色を投げた。

右の引用文にもあるように、大正元年当時智恵子は妹セキと共に、府下高田村雜司ヶ谷七一に住んでゐた。この本文の中で、洋画家利世子が長沼智恵子を、教会関係の仕事に従事している卷子を、妹セキとするのは、一目瞭然である。長沼セキが福島県二本松町在の両親に宛てた手紙（大正四年一月一日附、『光太郎智恵子』（昭和

35・8、龍星閣)所収41〜43頁)によると、渡米の件は北アメリカ行きであり、その目的は児童学研究で年限は二年、向こうで教会の子供を世話しながら大学に通学すると報告しているのが、田村俊子の小説「魔」は、ほぼ正確にその事実を伝えていっているといえよう。卷子(長沼セキ)が頭を剃って尼になりたいと告白しているのは、大正元年当時、既に妻子のある小宮と長沼セキとの関係が行き詰っていた事実を暗示しているのではあるまいか。セキの渡米は大正四年一月頃であったらしいが、大正四年十一月十八日に、長沼智恵子が郷里の両親に宛てた書簡(『光太郎智恵子』44頁、書簡二一)には、「實はいつかも申し上げました様にアメリカから歸つて来た人が妹の様子を見て、今のうち日本へ歸つたのが一番無事だらうと幾度もいつてゐましたつけ。しかし日本でもせきさんにとつては東京にもゐにくくなつての上なのですから歸るといふことは出来ませぬまいが。いろいろあつての上のことですからいますこし本當に心をいれかへてしつかりしてゐてくれるといいと思ひますが。」と書いており、また田村俊子も「魔」の第三節で、

類三は鴎子が何所へ行つてもその出た先きのすべてを聞かないでは済まされなかつた。鴎子は卷子が尼になりたいと云つてゐたことを話した。

「結婚さへすりやすべて解決がつくのさ。」

下類三は煙草をのみながら然う云つて笑つた。

「頭を剃つてしまはう。」

何と云ふみじめな絶望の叫びだつたらう——鴎子は友達のこと云つたことをいま意味もなく人に傳へてから、ふとそんな事が考

へられた。さうして烈しい欲求のためにあの太つた身體の血が動揺して渦巻きあがるやうな苦しさも思ひやられた。

と書いているので、長沼セキは大正元年の頃より、道ならぬ恋の道に踏み迷い、精神的にも苦境に陥っていたのではあるまいか。田村俊子のモデル小説「魔」は、長沼智恵子、妹セキの困惑する有様を小説化したもので、真実味が強く、ほぼ実話に近いと想定される。

(続)

(付記)

長沼セキについては、『ふるさと』の「智恵子」(佐々木隆嘉著、昭和53・6、桜楓社)に詳しい。

(1) 智恵子の次妹セキさんについては、光太郎智恵子の結婚前、二人の愛の疎通の仲介役ともなつたような長沼せき子への光太郎からの手紙が数通ある。また眞壁仁氏の「高村智恵子の一生」(筑摩書房刊「高村光太郎と智恵子」二七一頁)にも少し穿つたことが書かれてある。

よく名前も知らない人(智恵子の手紙には「小宮」と書かれてある)の子を身籠つた妹の身の処置に悩んだ智恵子は、沼津に赴き、友人は居ないがその母親に相談した。困却した智恵子の立場に同情して、ヤスさんの母親はセキさんを我が家に迎え入れ、ここで女兒を分娩させた。そしてその養育もしてくれたが、求める人があつて他に養子にやつた。後に上野家は成長後も心してやり、その結婚や就職の世話もしている。

「眞壁氏によつて「某所に預けていた。」と書かれてあるのも、実は上野ヤスさん宅であつたわけである。(『ふるさと』の「智恵子」)

一三、女学校時代 67頁参照)

(2) 智恵子の弟妹五女二男のうち、二女セキは智恵子と同窓の日本女子大学を出て大正四年に渡米し、やがて武井氏と結婚した。ロスアンゼルスより長沼家に送られてあつた写真には男児が生れていたことが見られる。その後一児を得て二児の母となつた。

明治四十二年より府下高田村雑司谷の下宿宿に智恵子と共に住んでいたが、智恵子が光太郎と知り合う時になって、妹のセキが二人の仲介役になつた時期があり、光太郎より「長沼勢き子様」宛の手紙が頻繁に出されている。(竜星閣版「光太郎智恵子」七頁より一七頁参照)

渡米の事情については、真壁仁氏の「高村智恵子の一生」(筑摩書房版「高村光太郎と智恵子」、二七五頁)や「女学校時代―卒業後の交友」、それに智恵子とセキが両親に宛てた手紙(「光太郎智恵子」三九頁より四七頁)などに因るとその経緯が察知される。昭和四十年頃まではロスアンゼルスに健在であつたが数年前死去したことが知られた。(同書、八 長沼家小史、127頁参照)

(3) 智恵子を心労さす事件は、遠くは大正三年末頃妹セキの私生子について沼津まで赴いての配慮処置、渡米と渡米後も大学より米国の妹のことについて相談に召請されるということがあつた。(同書、十三、智恵子の病因について、212頁参照)